

## 薬師寺東塔擦銘の研究： 刻書前半部とその背景について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教育学研究所 公開日: 2024-01-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣瀬, 裕之, 漆原, 徹, 遠藤, 祐介 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000146">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000146</a>

# 薬師寺東塔檨銘の研究

— 刻書前半部とその背景について —

A Study of Central Cylinder Signature of the East pagoda in Yakushi-ji Temple:  
The First Half of the Carved Calligraphy and Its Background

## 一、はじめに

本研究は、「中国仏教の日本への受容」をテーマとして「しあわせ研究」の調査を続行する中で、平成二十九・三十・令和元年度は、天平勝宝五年（七五三）刻の日本最古の「佛足石」に刻された銘文の書とその背景について書道学（廣瀬）・歴史学（漆原）・仏教学（遠藤）から論考し、「奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究」を共同で進め研究論文三篇を執筆し発表した。令和二・三年度は、「佛足跡歌碑」に注目し論考を二篇執筆し発表した。これらの研究成果を承け、令和四年度からは、これらと同じ奈良時代建造とされる薬師寺東塔の檨銘についての研究を開始した。本稿では、本年度得ることができた成果をここに執筆し発表したい。

廣瀬 裕 之\*  
HIROSE Hiroyuki  
漆原 徹†  
URUSHIHARA Toru  
遠藤 祐 介 ††  
ENDO Yusuke

まず、「檨」字は、よく見られる「てへん」ではなく、「木へん」に「察」という漢字で、音は「サツ」であることを述べておきたい。

この漢字「檨」には、「梓属の木の名前」の意と「仏塔の中心の柱・心の柱・刹（仏塔の頂部の飾り物・仏塔・仏寺の意）に通ず」の意がある。ここでは後者で、「東塔檨銘」とは「東塔の中心柱の（頂部を包み込み覆うようにかぶされた銅で作られた筒状の）飾りに刻まれた銘文」という意味となる。

薬師寺東塔は、かつて現在の東塔が、飛鳥時代に創建された本薬師寺からこの地への移建によるものか、それとも奈良時代、同寺移転によってこの平城京の地に新たに建てられた新建かとの論争があった。現在では、後者の非移建との説が強いようである。よって本稿

では、現存する薬師寺東塔は奈良時代の天平二年（七三〇）に造営されたと伝わる説を採る。この東塔は三重塔である。高さ33・6mで下から一・三・五番目の屋根は裳階もこしという飾りの屋根を付けているため六重に見えるのが特徴である。薬師寺は、数度の災害と享禄元年（一五二八）の兵火により薬師寺西塔の焼失など多くの堂宇を焼失している。しかし東塔は創建当時の建造物で現存する唯一のものでされ国宝に指定されている。「東塔は、薬師寺創建当初から唯一現存し、平城京最古の建造物」と薬師寺公式ホームページに記されている。東塔檼銘は、高い東塔の最上部の屋根上つまり、塔を構成する中心柱の頂部の上にかぶされた銅製の「相輪」下部の筒状の「檼管さつえん」に刻された銘文である。とても危険で本来は簡単に見ることができない場所に存在するものである。

東塔は、これまでに何回も部分的な修理が行われてきたといい、平成二十一年（二〇〇九）から史上初めての全面解体修理に着手し、令和三年二月十五日に竣工した。東塔相輪上部の「水煙」は、実にデザイン性に優れ、笛を吹きながら踊る奏楽天人、花籠をささげる天人、ハスのつぼみを捧げ持ちながら降りてくる天人ととても素晴らしいもので、大修理のため、塔の周囲全体に足場を組んで幕で覆い、そして、この水煙・九輪・檼管等の装飾品を上から順にすべてはずして地上に降ろし、中心柱やその木組みなどをむき出しにして、傷んだ箇所を補修しつつ全面的な解体修理が行われたのであった。この間、これらの現物は、地上で安置収蔵されていた。一定期間現物の一般公開がなされたがまたすぐにしまわれ、一般人は見る事ができなかった。現物が、平成期再建の西僧堂に安置収蔵され、令和三年に同寺を佛足跡歌碑研究のため訪れたときに、ここへ

案内してくださり、かつて官製はがきが七円の時代（昭和四十二年八月〜四十七年一月）のはがきに刷り込まれた切手デザイン①にも採用された東塔の水煙と、同時にこの檼銘の刻された檼管を観察させていただけともうれしく思った。この時に初めて至近距離でじっくりと全体と細部をよく見せていただくことができた。東塔の屋根上に載せられた金属製の相輪（宝珠・竜舎・水煙・九輪・檼管・平頭・伏鉢ふくばち・蓋板ふたいた・露盤つらばの各部分から成る）の現物は、今後大切に保管収蔵することとなったとのことで、東塔大修理の完成後、再び屋根の頂上に戻して載せることなく、全く同じ形状に作られた複製を東塔の屋根上に載せることとなったという。よって本年度の令和四年度も再度地上で東塔檼銘の現物の調査研究をさせていただけることとなった次第である。薬師寺のご厚意に深く感謝したい。

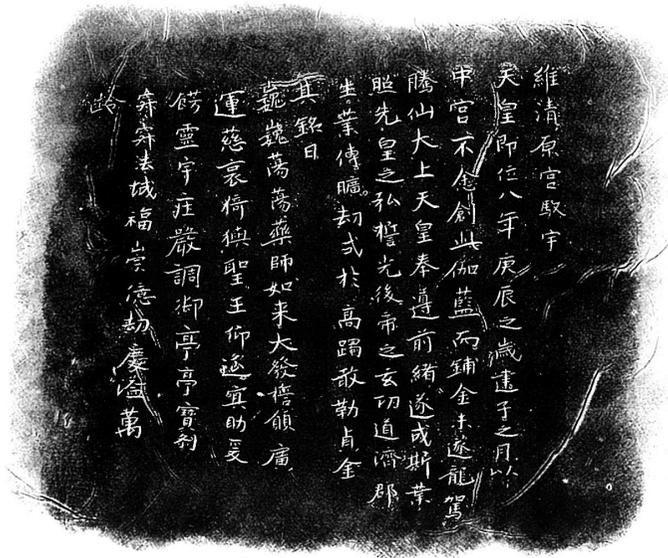
薬師寺所蔵の拓本と原刻の刻面調査及びその撮影写真を基として摩滅前の刻書の姿をできるだけ明らかにして復元することを試みた。そして、この銘刻について仏教学の面からも考察を加えた。また、奈良時代以後、佛足石の存在は、従来の研究では空白期を迎え、その後江戸時代になると佛足石がまた盛んに造られるようになるのだが、その空白の期間（中世）のその存在を埋める佛足石の存在について探るべく私たちはその調査をあわせて行い、引き続きその新しい成果を収めることができたのでここに記したい。

## 二、檼銘の拓本

まず、薬師寺から許可を得て提供いただいた飛鳥園撮影の東塔檼銘の拓影写真と原物の写真を次に掲載する。この拓影写真の基とな

つた原拓（軸装に装丁）を薬師寺調査訪問時に拝見させていただいた。この標銘は、本来、東塔頂部にあるもので、よほどの機会がないと実物を拝見するのも採拓するのも危険が伴いかなり困難なものである。この原拓軸に跋文や添え書きがなく、採拓時期が不詳とのことであつたが、昭和四十九年刊行の書籍には、その図版の拓本の紙に入った皺の形状からこれと同一のものが掲載されていることが判明したので少なくともすでに採拓から五十年の歳月を経て

▼東塔標銘（薬師寺蔵原拓・整本）



いることが判った。塔に登って直接採拓したことも考えられないでもないが、おそらく五十年以上前で修復等により塔に足場が組まれた時、もしくは修理等で頂部の飾りをはずしたであろう期間があつたとすればその時に採拓された可能性が考えられる。私は、拝見した拓本の拓と紙の様子から、昭和二十六年（一九五〇）に水煙を東塔から下したという記述があるので、このころの可能性が高いのではないかと考える。どちらにしてもこの拓本は希少で貴重なものである。採拓の墨色の具合もよく精緻な拓だが、紙面に皺がずいぶん入っていることが少し気になった。しかし、逆にこの皺が、同一の拓本か判断する決め手となつたのである。

標管が筒状の単なる円柱形だと採拓時に皺が入ることはほとんどない。ところが標銘の刻された実物の銅製の標管を拝見すると、やはり下部の直径よりも上部の直径がわずかに小さく、文字が刻された側面は、わずかであるが弧を描くように上部に行くほど湾曲していることが判った。平面の紙で曲面を採拓するときは、文字の部分になるべく紙の皺ができないように、わざと行間や周囲等に寄せつつうまく皺の位置を調整してタンポで打ち込み処理するのが名人の技である。3行目と11・12行目の文字上の皺が無ければさらに最上であつたと考えるが、刻面がわずかに球面状となつているため採拓時の刻面への紙貼りが難しかったからだといえよう。採拓時の苦労が垣間見られるものである。縦から齢までの横幅が32cm。2行目の天から以までの縦幅が28cm。11行目の寂から萬までの縦幅が24cmである。

▼東塔檨銘（実物）



三、拓本から見られる原刻の字配り

拓本から見られる原刻の各行における文字と字数（字配り）は次の通りである。各行の文字数が一致せず次第に少なくなっていく傾

向にある。また、活字では表現できないが、7～9行目は、行の中心が右の方へ曲がり僅かにカーブを描き、10行目からまた行をまっすぐに書く努力をして刻されていることが拓本より見て取れる。

【檨銘原刻による配字】

行目	文字
1	維清原宮馭宇 . . . . . 6
2	天皇即位八年庚辰之歲建子之月以 . . . . . 15
3	中宮不念創此伽藍而鋪金未遂龍駕 . . . . . 15
4	瞻仙大上天皇奉遵前緒遂成斯業 . . . . . 14
5	照先皇之弘誓光後帝之玄功道濟郡 . . . . . 15
6	生業傳曠劫式於高躅敢勒貞金 . . . . . 13
7	其銘曰 . . . . . 3
8	巍巍蕩蕩藥師如來大發誓願廣 . . . . . 13
9	運慈哀猗猊聖王仰延冥助爰 . . . . . 12
10	飭靈宇莊嚴調御亭亭寶刹 . . . . . 11
11	寂寂法城福崇億劫慶溢萬 . . . . . 11
12	齡 . . . . . 1

沢村仁の論考「飛鳥・天平時代の塔」<sup>(3)</sup>のなかで、宮上茂隆「薬師寺東塔檨銘考」（『建築史研究』三八号・昭和四十七年）を引用し、「現存の東塔の檨銘を創建当時のものと解釈し、銘文のある檨柱を持ってきているから移築であろうとの素朴な推定もあったが、これについては、現状での銘文の字・行配りの乱雑さは文体の莊重

さに比べて似合わず、旧塔にあつては十二字十二行の整々たるものだったのを、書写・追刻の段階で崩れ、誤字も生じたとの考えが示されている。」と述べ、次のようであつたのではないかとの案を記している。

【本薬師寺東塔櫓銘復元案による配字（宮上説）】

- 1 維清原宮馭宇
- 2 天皇即位八年庚辰之歲建子
- 3 之月以中宮不念創此伽藍而
- 4 舖金未遂龍駕騰仙太上天皇
- 5 奉遵前緒遂成斯業照先皇之
- 6 弘誓光後帝之玄功道濟群生
- 7 業傳曠劫式旌高躅敢勒貞金
- 8 其銘曰
- 9 巍巍蕩蕩薬師如来大發誓願
- 10 廣運慈悲猗猗聖王仰延冥助
- 11 爰飭靈宇莊嚴調御亭亭寶刹
- 12 寂寂法城福崇億劫慶溢萬齡

現在の薬師寺は、平城京遷都に伴い現在の地に移る前は、現在の奈良県橿原市に建立されたという。奈良市の薬師寺と区別するため、本薬師寺と呼ぶ。現在では、広大な田地の中のあぜ道を通っていくと塔などの礎石のみが存在する跡地となっている。確かにこの寺の東塔跡に立派な礎石のみが現存していた。ここに東塔が建立されていたことは礎石からうかがい知ることができたが、ここに同じ

銘文が櫓管に刻されていたかどうかは今となっては確かめようもないが、銘文の十二字十二行説に関しては、面白い一つの見解だと思った。

しかし、「現状での銘文の字・行配りの乱雑さは文体の荘重さに比べて似合わず」の記述については賛同しない。書道専門の私の立場からすると、銘文の文字は王羲之や中国六朝の書風の流れを汲む素晴らしいものであり、行配りは一見乱れているように見えるが、実は、できるだけ丁寧に、危険を顧みず塔の上に登って、直接書き、刻した証だと考える。①なぜ銘文の行の中心が弧を描くように曲がついていたり、また急に元に戻ってまっすぐにしたりとなつたのか。②一行の字数の変化について、これらの理由を、ほぼ解明することができた。少し記すと、②については、櫓管（筒状のものの中には塔の心柱が通っている）の側面を囲むように付けられた二本の命綱（いわゆる安全ロープ）の位置関係によるものと考ええる。①については、命綱の体への結び方とその揮毫者の揮毫時の姿勢によるところが大きいですが、もう一つ重大な理由があつたことが判明した。これらについては稿を改め検証し発表したいと考える。

#### 四、櫓銘の銘文の書の復元

櫓銘の銘文の書の復元をするにあたって、一行目が、実物を撮影した写真、二行目が拓本写真、三行目が、これらをもととして復元してみた書の姿である。

▼東塔標銘(前半部)

原刻写真①



拓本



復元



復元

騰仙大上天皇奉導前緒遂成斯業  
中宮不念創此伽藍而鋪金未遂龍駕

拓本

騰仙大上天皇奉導前緒遂成斯業  
中宮不念創此伽藍而鋪金未遂龍駕

原刻写真②

騰仙大上天皇奉導前緒遂成斯業  
中宮不念創此伽藍而鋪金未遂龍駕

復元

照先皇之弘誓光後帝之玄切道濟郡  
生業傳曠劫式於高躅敢勒貞金

拓本

照先皇之弘誓光後帝之玄切道濟郡  
生業傳曠劫式於高躅敢勒貞金

原刻写真③

照先皇之弘誓光後帝之玄切道濟郡  
生業傳曠劫式於高躅敢勒貞金

## 五、東塔檨銘と薬師信仰に関する考察の視点

### ―佛足石信仰と関連して―

『日本書紀』卷二九、天武九年（六八二）十一月条に、天武天皇が皇后（後の持統天皇）の病氣平癒を願い、薬師寺の建立を始めたという記事がある。そして『続日本紀』卷一、文武天皇二年（七〇二）十月条に、藤原京の地で薬師寺がほぼ完成したことを伝える記事が確認される。『薬師寺縁起』によれば、薬師寺が平城京に移転したのは、養老二年（七一八）のことである。

『日本書紀』卷二九、天武九年四月条にある国大寺とは具体的には飛鳥寺、百濟大寺、川原寺を指すが、薬師寺はこれら国大寺に続く国営の大寺院として認識され、四大寺の一つに列せられた<sup>4</sup>。井上光貞氏の研究によると、「天武朝からは、律令国家の地方統治機関たる国府ごとに、祈年行事的な金光明経の説誦をおこなう法会がはじめられ、これがやがて天平期に国分寺制度として開花する」のであり、これは「国家は仏教に対して、その哲理・思想そのものの普及よりも、むしろその呪力が国家の繁栄をもたらすことに期待した」という律令的国家仏教の性質を最も鮮明にあらわしていると考えられている。

筆者は薬師寺佛足石と佛足跡歌碑の共同研究に参加し、その際に主に佛足石信仰と『観仏三昧海経』の関係について考察をおこなった。佛足石信仰は仏の威神力によって人々の幸せや国家の安泰を願う点で、井上氏が指摘した律令的国家仏教の性質に合致している。本稿では佛足石信仰との関連性に留意しつつ、薬師如来の信仰に基づいて作られた薬師寺東塔檨銘を研究対象とし、東塔檨銘に見

える人々の願い、薬師信仰の根拠となる経典、東塔檨銘と中国南北朝仏教とのつながりという三つの視点から考察を進めることとしたい。

## 六、東塔檨銘に見える人々の願い ―第一の視点―

薬師寺東塔檨銘とは、東塔の相輪部下方にある檨管の西側表面に刻まれた銘文のことである。檨銘からは薬師如来に対する信仰が看取されるが、その内容もまた井上氏が指摘した律令的国家仏教の性質と密接に関連しているようである。檨銘を考察するに際し、まず上述した三つの視点の概要を示しておきたい。

第一に、檨銘に見られる薬師信仰は国家安寧の願いと結びついたものだが、この願いと聖武天皇が国家仏教を推進する動機となった願い、および佛足石を造立した文室真人智努の願いの連続性の跡付けを試みるという視点である。第二に、檨銘に見える主要な崇拜対象は薬師如来であるが、その背景に釈迦信仰があることに着目し、釈迦信仰に基づく佛足石信仰との関連性を見出し、いくという視点である。また、東大寺は『華嚴経』、国分寺（金光明四天王護国之寺）は『金光明経』、国分尼寺（法華滅罪之寺）は『法華経』というように、主要な所依の経典は異なるが、釈迦信仰が扇の要となった重層的な信仰形態が想定されるため、第二の視点においては、薬師信仰にとどまらず視野を広げた考察を試みたい。第三に、『仁王般若経』（以下、『仁王経』と記す）と『金光明経』を経証とした国家仏教と薬師信仰が融合した信仰形態の源流は、中国南北朝

にさかのぼる可能性が高いため、檮銘に見える信仰と中国仏教の関連性について検証するという視点である。

本節では第一の視点の考察をおこなうが、最初に檮銘の起草年代の確認から開始したい。檮銘の起草年代については諸説あり、文武天皇から聖武天皇の時期とされている。<sup>⑥</sup>起草年代を最も早く想定した場合は文武天皇が即位した六九七年であり、佛足石が成立した天平勝宝五年（七五三）との時間差は五十六年である。一方、起草年代を最も遅く想定した場合は、聖武天皇が退位した天平勝宝元年（七四九）であり、両者の時間差はわずか四年である。檮銘に見える薬師信仰と佛足石信仰はこれまで個別に研究されてきたが、両信仰の年代の近さと当時の信仰形態の重層性を考慮すると、両信仰の関連性について検討する必要がある。檮銘に見える薬師信仰を考察するにあたり、檮銘の書き下し文を提示しておきたい。<sup>⑦</sup>

維れ、清原宮に馭宇せる天皇、即位して八年、庚辰之歳の建子之月に、中宮不念なるを以て、此の伽藍を創る。而るに鋪金未だ遂げざるに、龍駕騰仙す。

大上天皇、前緒に遵い奉り、遂に斯業を成す。先皇の弘誓を照らし、後帝の玄功を光かし、道は郡生を済い、業は曠劫に伝わる。式て高躡に於いて、敢えて貞金に勸む。

其の銘に曰く、

巍巍たり、蕩蕩たり、薬師如来。

大いに誓願を發して、広く慈哀を運らす。

猗猗、聖王、仰いで冥助を延かんとす。

爰に靈宇を飭り、調御を莊嚴す。

亭亭たり、宝刹。寂寂たり、法域。

福は億劫に崇く、慶は萬齡に溢れん。

檮銘中にある「躡」は「迹」を意味し、「高躡」は「立派な行爲」と解される。檮銘では「巍巍たり、蕩蕩たり、薬師如来」と記して薬師如来の偉大な威神力を褒め称え、「先皇の弘誓を照らし、後帝の玄功を光かし」と記して天皇の事跡を称揚しているため、高躡とは薬師如来の威神力と天皇の善行を指すものと想定される。なお、「清原宮に馭宇せる天皇」と「先皇」が文武天皇を指すことは確固たる通説となっているが、「大上天皇」と「後帝」が誰なのかについては先学の見解が分かれている。本稿ではこの点に関する詮索はせず、「聖王」に着目して檮銘に見える人々の願いについて解説を試みたい。

聖王とは仏教における理想の帝王である転輪聖王の略称と見られ、檮銘においては菩薩の精神を持つ帝王としての天皇を指し、造寺造仏によつて「福は億劫に」「慶は萬齡に」わたつてもたらされると記されている。ここから抽出すべき要素は、第一に天皇が菩薩の精神を体現した存在であること、第二に輪廻転生の世界観を背景とした実践としての啓福（興福）という要素である。<sup>⑩</sup>檮銘に見えるこれら二つの要素と、聖武天皇の国家仏教における願いとの間には連続性があることが想定される。そこで以下に、聖武天皇の国家仏教について考察し、その後に聖武天皇の国家仏教と関連付けつつ佛足石信仰について取り上げることとする。

聖武天皇が推進した国家仏教の基本方針は、国分寺と国分尼寺の創設という事跡から最も明瞭に観察される。国分寺制度は、『日本

書紀』卷二九、天武天皇五年(六七六)十一月条にあるように、天武天皇が諸国に使いを送って『金光明経』と『仁王経』を誦誦させたことが端緒とされる。また『日本書紀』卷三十に、持統天皇八年(六九四)五月に『金光明経』を諸国に送った記事があり、これもまた国分寺成立の原初段階と考えられている<sup>11)</sup>。

『続日本紀』卷一四によると、聖武天皇は天平十三年(七四一)三月二十四日、国分寺建立の詔を發し、国分寺と国分尼寺を諸国に設置するよう命じたことが確認される。『金光明経』卷二、四天王品(大正一六、三四三下)に「如来、是の金光明経を説くは衆生の為の故なり。一切閻浮提内の諸人王等をして正法を以て治めしめんが為なり」とあるように、菩薩の精神を持つ「人王」が仏法によって国家を統治すべきことが説かれている。これがまさに国分寺建立の根本精神であり、聖武天皇はさらに国分尼寺を建立し懺悔滅罪によって国を浄めようとしたのである。

東塔檨銘の起草者は、『広弘明集』卷二八啓福篇所収の『西明寺鐘銘』を参考にした可能性が高い。『広弘明集』卷二八は啓福篇と悔罪篇から成るが、啓福と悔罪は輪廻転生の世界でよりよく生まれ変わるための重要な実践項目である。啓福(興福)に基づく檨銘の作成と国分寺の建立、および悔罪(滅罪)に基づく国分尼寺の建立<sup>12)</sup>は、いずれも輪廻の信仰との関連が強いものと解される。

『続日本紀』卷一五によると、天平十五年(七四三)正月十三日に聖武天皇が詔を發して、金光明寺(後の東大寺)に多くの僧を招き『金光明経』を誦誦させ、同年の十月十五日に大仏造立の詔を出している。また『続日本紀』卷一八に、天平勝宝四年(七五二)四月九日に大仏開眼供養の法会を挙行した記録が見られる。これら極

めて有名な事跡も、菩薩の精神を持つ天皇の統治を称える檨銘と同質の信仰に基づいたものと言えよう。

聖武天皇の国家仏教に続いて、薬師寺の佛足石信仰に目を転ずることとしたい。文室真人智努(もとの智努王、以下は智努と記す)が薬師寺佛足石を造立したのは、大仏開眼供養の翌年、天平勝宝五年(七五三)七月十五日である。智努は天武天皇の孫にあたる人物で、『続日本紀』卷一四を見ると、恭仁宮(天平十三年九月八日条)と紫香楽宮(天平十四年八月十一日条)の造宮に造宮卿として関与したことが確認される。廣岡義隆氏は、智努が天平十八年四月二十二日に正四位上、天平十九年正月二十日に従三位に叙せられたという昇進の早さに注目して、「それだけ宮廷において重きをなしていたと見るべきであろう」と指摘している<sup>14)</sup>。

天平勝宝四年四月九日に大仏開眼供養がなされ、同年九月頃に智努は臣籍降下している。廣岡氏の研究によると、臣籍降下の目的は天皇になる可能性を放棄するためとされている<sup>15)</sup>。そこには聖武上皇と孝謙天皇に対する配慮があったのかもしれない。

『万葉集』卷一九に四二七五番歌として、智努が同年十一月二十五日の新嘗会肆宴で奉った「天地と久しきまでに万代に仕へまつらむ黒酒白酒を」という応詔歌が収載されている<sup>16)</sup>。これは上皇と天皇への忠誠を歌ったものである。この歌は大仏開眼の功德が宣揚されている時期の歌であるため、菩薩の精神に基づく国家統治に対する強い支持を表明したものとと言えるであろう。智努はその翌年に佛足石を造立し、釈尊の足跡を刻んだ佛足石が幸せの瑞祥であることや、出家も在家も皆参拝すべきことを佛足石に記しており、佛足石造立の願ひは聖武天皇による菩薩の精神に基づく国家統治に呼応したもの

と見られる。

佛足石の銘文では『観仏三昧海経』を引用して、佛足石造立によつて「衆罪が滅する」「極重悪罪を除く」「極重悪業を除く」ことに対する期待が表明されている。<sup>(18)</sup>これは聖武天皇による国分尼寺建立と同様に滅罪の信仰に基づくものである。

以上のことから、薬師寺に存在する東塔擦銘と佛足石信仰には、聖武天皇の国家仏教に顕著に見られる信仰形態、すなわち天皇による菩薩の精神に基づく国家統治の推進、および啓福と滅罪の実践という信仰形態が通底していると見えよう。

以前の論考で指摘したように、薬師寺の佛足跡歌碑は現存する佛足石を基に制作されたものではない可能性があるが、『観仏三昧海経』を介して両者の信仰の特徴に類似点が観察される。<sup>(19)</sup>そこで、天皇による菩薩の精神に基づく国家統治の推進、および啓福と滅罪の実践に関連すると見られる歌を挙げることにする。<sup>(20)</sup>

#### 【菩薩の精神】

みあとつくる いしのひびきは あめにいたり つちさへゆす  
れ ちちははがために もろひとのために (1番歌)

このみあとを たづねもとめて よきひとの いますくには  
われもまいてむ もろもろをいて (8番歌)

をちなきや われにおとれる ひとをおほみ わたさむためと  
うつしまつれり つかへまつれり (13番歌)

#### 【懺悔】

おほみあとを みにくるひとの いにしかた ちよのつみさへ  
ほろぶとぞいふ のぞくとぞきく (17番歌)

よつのへみ いつつのもの あつまれる きたなきみをば  
いとひすつべし はなれすつべし (19番歌)

これらの佛足跡歌に見える信仰は、東塔擦銘に見える菩薩の精神および啓福と滅罪を重視する信仰を継承するものと言えるであろう。

## 七、薬師信仰の経典における釈迦信仰

### —第二の視点—

東塔擦銘の起草年代は、上述したように文武天皇から聖武天皇の時期とされている。東塔擦銘からは薬師信仰が顕著に観察されるが、本節では東塔擦銘に見える薬師信仰の経証となる経典、およびそれに基づく信仰の特徴について考察することとしたい。

奈良時代天平期における薬師信仰の経証となる経典として、南朝宋代成立の『仏説灌頂拔除過罪生死得度経』<sup>(21)</sup>（以下、南朝宋訳と記す）、隋代の達摩笈多訳『仏説薬師如来本願功德経』<sup>(22)</sup>（以下、隋訳と記す）、唐代の玄奘訳『薬師琉璃光如来本願功德経』<sup>(23)</sup>（以下、玄奘訳と記す）と義浄訳『薬師琉璃光七仏本願功德経』<sup>(24)</sup>（以下、義浄訳と記す）の四種が存在する。これらのうち、どれが擦銘の経証であるのかを確定することはできない。本節では、複数の新訳が登場した後も南朝宋訳が使用されていたことを確認し、擦銘を考察する際には南朝宋訳の影響まで視野に入れるべきことを提示したい。

伝聖武天皇筆「中聖武」と称される写本の一つに、東京国立博物館所蔵の『灌頂経』巻第九「仏説灌頂召五方龍王撰疫毒神呪上品経」<sup>(25)</sup>がある。もしこれが真筆であれば、聖武天皇が『灌頂経』巻一二す

なわち南朝宋訳も筆写した可能性が高いものと考えられる。

天平勝宝八年（七五六）に聖武天皇が没し、その六年後の天平宝字六年（七六二）十二月から閏十二月にかけて、造東大寺司の写經所において『十二灌頂經』の書写がおこなわれた。『灌頂經』書写の経緯については、山本幸男氏によって詳細な研究がなされている。<sup>24</sup>『灌頂經』十二卷を十二部作成し、天平宝字七年五月十三日から十四日の間に、内裏に八部を納め、残りの四部を香山薬師寺（新薬師寺）・東大寺・興福寺・元興寺に納めたという。このことから、『灌頂經』が天平期において非常に重視されていたことがわかる。また香山薬師寺にも『灌頂經』が納められたことから、『灌頂經』が当時の薬師信仰の重要な経証として認識されていたことが確認される。

東塔檨銘の経証となった經典に続いて、古代日本における薬師信仰と釈迦信仰および懺悔との関係について概観することとした。五来重氏は国分寺と薬師信仰の関係について、「大部分の国分寺は薬師如来像を本尊とし」ており、「国分寺の薬師如来は薬師悔過本尊とする目的があった」という見解を示している。南朝宋訳の正式名称は『仏説灌頂拔除過罪生死得度經』であり、その名の通り本經の中では、薬師琉璃光仏の名字や功德を聞き、懺悔と滅罪をすれば、生死の苦を離れ、悟りを得られることなどが説かれている。南朝宋訳は他の三種の經典に比べて、滅罪と懺悔との関わりが深い。そのため、古代日本における薬師信仰と懺悔の密接な関係は、南朝宋訳の影響を受けた可能性が高いと言えよう。東塔檨銘においては、造寺造仏の功德、いわゆる啓福を説くものの、懺悔についての言及は見られない。しかし、東塔檨銘を制作した人々が啓

福と対になる悔罪や滅罪の方法としての懺悔も同時に重視していたことを想定すべきであろう。

上記四種の薬師信仰の經典を見ると、釈尊が文殊や阿難に対して薬師如来の功德を説いており、いずれも釈迦信仰を前提とした經典であることがわかる。釈迦信仰を扇の要とした『華嚴經』『金光明經』『法華經』の重層性という奈良時代の信仰形態の特徴について先に指摘したが、更に薬師信仰を説く四種の經典も重ねられたものと考えられる。

佛足石信仰は釈尊の足跡に対する信仰であり、釈迦信仰の一種に属する。本節で述べた考察内容を総合すると、薬師寺に存在する東塔檨銘と佛足石の信仰形態、および聖武天皇の国家仏教に見られる信仰形態においては、釈迦信仰が通底し、啓福と滅罪、そして滅罪の方法としての懺悔が重要な要素となつていると言えるであろう。

## 八、中国南朝仏教との関連 — 第三の視点 —

第六節で述べたように、檨銘は『広弘明集』卷二八所収の『西明寺鐘銘』を参考にして書かれた可能性が高い。石田氏の研究<sup>27</sup>によると、『広弘明集』は奈良時代の天平十一年（七三九）に日本に存在したことが確認される。檨銘の成立年代の上限は文武天皇が即位した六九七年であるため、『広弘明集』所収の『西明寺鐘銘』とは別の文書を参照した可能性も排除できない。しかし奈良長谷寺の「銅板法華説相図」の銘文は、『広弘明集』卷一六所収の沈約撰『瑞石像銘』および『光宅寺刹下銘』を参考にして書かれており、その成立年代は文武天皇二年（六九八）とする説が有力である。それゆ

え、仮に檿銘の起草年代が上限の文武天皇元年であったとしても、単独の文書として請来されたもの、または記録にない書籍に収載されたものを参考にした可能性よりも、唐を代表する学僧道宣が編纂した『広弘明集』所収の『西明寺鐘銘』を権威あるものとして受容した可能性が高いように思われる。

『広弘明集』巻二八は啓福篇と悔罪篇から構成されるが、これは啓福と悔罪が輪廻の世界でなすべき重要な実践として認識されていることを反映している。『西明寺鐘銘』は啓福篇の最後に収載されており、これを檿銘に引用したことは薬師信仰と啓福の関係を示すものと考えられる。

薬師信仰と悔罪（滅罪）の関係を知るには、『広弘明集』悔罪篇所収、南朝陳の文帝撰『薬師齋懺文』が手掛かりとなる。陳の皇帝たちは南朝梁の武帝が体系化した国家仏教を継承しており、『薬師齋懺文』もその一つの表れである。『広弘明集』巻二六所収の『断酒肉文』などに、梁武帝が菩薩金輪王として国家統治に臨む姿が観察されるが、これは檿銘に記されている「菩薩の精神を持つ天皇」の起源となることが想定される。そしてまた、これは檿銘に見える信仰との連続性を有する佛足石信仰とも親和性があると考えられる。薬師寺において檿銘と佛足石が併置されたことの意義とは、啓福（興福）・悔罪（滅罪）の精神の継承と発揚にあると言えるかもしれない。なお、東塔檿銘の思想的起源に関しては更に掘り下げる必要があるが、中国南朝仏教および隋唐仏教と関連して多岐にわたる考察が求められるため、稿を改めて論ずることとした。

## 九、中世の佛足石

今年度の中世佛足石の存在確認については、以下の通り明確なものは、新潟県妙高市関山の関山神社境内に所在する佛足石のみであった。また今年度の調査個所の概要を併せて報告する。

今回の中世佛足石の探訪は、共同研究調査の一環として南山城の山間部に所在する寺院及び薬師寺と深い関係をもつ法隆寺を中心に行った。南山城の諸寺は、いずれも古い開基と由緒を持つ真言宗と真言律宗の寺院である。従来を経験から、佛足石存在の可能性が高いと思われる条件として、

- ① 伽藍創建以前に布教対象の村落が散在するなどある程度の人口集住が想定される地域。
- ② 開創以後、戦乱地震などの自然災害で伽藍が消失または荒廃して一定期間伽藍が再建されなかった時期がある。

① ②の場合双方ともに、佛足石拝跪による暫定的な信仰の場か、伽藍再興までの信仰対象として佛足石が設置されたのではないかと推定される。今回調査した南山城の山間部に点在する寺院は、いずれも古代に創建されたことが明確であるにもかかわらず、中世に荒廃していた時期があると考えられること、また奈良及び京都の都からも近く、山間部とはいえ古くから開発されて集落が散在していた事実から佛足石の存在が期待された。

また一方で、南山城に散在する寺院は、創建以来の仏像その他の寺宝を所有しており、宗門大寺院と地域の保護との双方から支援が断続的に行われていたことも明らかであることから、再建までのさまざまな佛足石設置の必要があったと考えられることができる。

この予測に従って、今年度の共同調査では、南山城に散在する忍辱山円城寺<sup>(31)</sup>、浄瑠璃寺<sup>(32)</sup>、岩船寺<sup>(33)</sup>、海住山寺<sup>(34)</sup>、蟹満寺<sup>(35)</sup>、神童寺<sup>(36)</sup>の各寺と、薬師寺と深い関係をもつ法隆寺の境内に中世佛足石を探したたのである。

その結果、風化磨滅以前に佛足石であった可能性がある石造遺物を浄瑠璃寺と法隆寺で見出すことができた。浄瑠璃寺のもの(写真1)に見るように、足の輪郭はかなり明瞭に看取できるが、佛足の線刻は風化磨滅して全く確認することはできない。線刻面を上部に向けて覆堂もなく風雨にさらされてきた

状況から磨滅が進行した事情が容易に想像できた。また法隆寺のもの(写真2)は、石本体に人工の加工が認められ周縁部位に切欠きもみとめられたものの、切欠け部にあることが期待される線刻仏はもちろん、明らかに本体の足型があったらしい窪みを含めて佛足石の彫刻の痕跡を見出すことはできなかった。しかしながら、法隆寺では佛足石についての記録や伝承が失われているものの、この佛足石であったらしい石造遺物は、現在でも拝跪石として周囲に囲いを設けて礼拝の対象となっている事実は興味深かった。今年度



▼写真1

までの調査の経験から、中世佛足石の特徴として本体の周縁部に切欠きがあるものが多いと考えているが、薬師寺の国宝佛足石のように古代と明証のある唯一のものに関していえば、周縁の切欠きなどは認めることはできない。古代あるいは中世の佛足石で露天に忘れられたものは、風化してそれと知ることは難しいだけでなく、古代のものは線刻の仏があるような切欠き部分は最初からなかったのかもしれない。



▼写真2

## 十、関山神社中世の佛足石

今年度明確な中世佛足石として紹介するのは、新潟県妙高市関山神社境内にある佛足石（写真3）であるが、新たに本研究で発見したわけではなく、すでに国宝薬師寺佛足石の次に古い中世佛足石として新潟県妙高市の現地では知られていたものである。当該佛足石は、新潟県指定文化財に指定されている<sup>37</sup>。高さ二メートルの安山岩の垂直面正面に釈迦左足形の佛足を刻し、佛足右側に釈迦の実印とされる華判<sup>38</sup>、左側には舍利塔を刻している他に類例を見ない特異な形式を示すものである。佛足のみならず華判と舍利塔も同一面に刻するもので、華判の類例が南北朝期に散見されることを根拠として、関山の佛足石は南北朝時代のもの<sup>39</sup>と説明されている。新潟県教育委員会が昭和五十五年に文化財に指定する際には、南北朝時代の佛足石と断定した上で、国宝の薬師寺佛足石に次いで二番目に古いものとしている。しかしながら、中世佛足石

▼写真3



▼写真4



の研究は殆ど皆無の状況であり、関山の佛足石についても、古文書古記録及び関説する文献は管見の限り見られない。そのため華判が刻されていることから他の華判の使用例が認められるとする南北朝期のものであるとされながら、文献での裏付けや年紀が刻されていない二つの理由から国の文化財指定に至っていないものとみられる。

国宝指定の薬師寺佛足石の次に古い南北朝期の制作ということが事実とすれば、国指定の文化財に指定される可能性は高いと思われる。これはいうまでもなく中世とみられる佛足石に関する文献資料がないことから比較検討もできないことも大きな理由であると思われる。本来佛足石は仏教の教義に深くかかわって成立したものであり、関山神社境内に残されていることについては、若干の説明を要する。現在は関山神社の社殿しか残されていないが、同神社境内には、明治の廃仏毀釈まで寛永寺の末寺として天台宗の関山宝蔵院という別当寺院が存在しており、またそれ以前から妙高山山岳信仰の修験の拠点寺院があった。現在重要文化財に指定されている関山神社蔵「銅造菩薩立造」<sup>39</sup>は、聖観音菩薩で百済仏とされ、七世紀には関山に招来された仏像だったといわれており、中世には関山権現に伝来したものである。関山の地には妙高山をご神体とする山岳信仰の拠点として里宮が成立したのが発祥とされ、仏教伝来以後神仏習合して関山権現という寺院として信仰の場となっていたらしい。伝承では古く和銅元（七〇八）年に創建されたとされる。平安時代には山岳修験を信仰の核とする密教思想の影響を受けて修験道場となり、十二世紀の末法思想によって、弥勒仏あるいは阿弥陀仏を模したとされる石造遺物（写真4）が多数造立されて境内に残されている。

中世には山岳信仰の隆盛とともに寺勢も拡大し、中世前期には木曾義仲が現存する三体仏を寄進したとされ、中世を通じて山岳修験の拠点として京都との文化的な接点もあったことが知られる。<sup>(40)</sup> 中世後期の戦国時代には上杉謙信が深く帰依して伽藍五十を超える規模となつて寺勢は繁栄したという。しかし、謙信死後、上杉氏家督をめぐる御館の乱で上杉氏の勢力が大きく衰退した。御館の乱の勝者として上杉家の家督を継承した景勝に対して、天正十（一四六七）年、織田信長の部将森長可が川中島方面から越後侵攻した際に、上杉方の防衛拠点の一つだった関山周辺は織田方軍勢によって破壊放火されたと伝えられる。<sup>(41)</sup> また文献史料は確認できないが、当該佛足石が作成されたとされる南北朝期は、越後国は魚野川流域の波多岐庄・妻有庄を中心に大井田・小国・羽川・小森沢氏をはじめとする新田一族庶子家<sup>(42)</sup>が分布し、越中、加賀の南朝勢力と連携する地理的位置にあった。このため南朝勢力が比較的強い地域であったことから南北両軍の攻防の場となつたことは想像に難くない。また観応擾乱でも足利直義党の有力部将である上杉憲顕が越後・上野両国の守護をつとめており、尊氏党部将の宇都宮氏綱・芳賀禪可との激しい攻防が行われた地域でもあった。おそらく古くからの山岳信仰の場として成立していた関山権現の伽藍も戦闘の結果、破壊されたことも再三<sup>(43)</sup>だつたと思われる。その後江戸初期には、宝蔵院が江戸幕府の支援を受けて関山宝蔵院<sup>(44)</sup>として再興し、その庭園は発掘再整備されて指定名勝旧関山宝蔵院庭園として、国指定名勝に指定されている。また同境内には、前述したように関山の佛足石をうかがい知るうえで重要な石仏群が残されている。関山石仏群は、制作年代として平安時代の特徴を備えているとされ、写真

で確認できるように石仏下部を土中に埋納する手法で鎮座させているのが特徴といわれるが、やはり文献史料は皆無である。

この関山佛足石は、古代以来の信仰の場であったが、中世の戦乱で再三合戦の戦場となり、荒廃した時期があったことが南北朝期に佛足石を造立して信仰の対象としたことが推定できる。また平安時代に石造遺物が盛んに作成されたことも中世佛足石作成と関係があるものと考えられることができる。

## 十一、結びにかえて

本研究は、武蔵野大学「しあわせ研究」の基金を受託により「中国仏教の日本への受容」というテーマで調査を継続してきた。初期仏教の日本での展開の一形態として奈良時代の薬師寺佛足石・佛足跡歌碑を研究の基礎と位置づけ、その碑文の研究を中心として従来の先行研究を踏まえながら、新たな字句の翻刻と修正、またその意味するところを広く紹介するために新たに分かりやすく解釈した。

薬師寺の国宝東塔の櫓管に刻された銘文についての本研究は、従来の研究蓄積をさらに前進させることができた。また継続研究している中世佛足石の存在とその特徴の確認は、佛足石研究において、空白とみられていた中世佛足石の発見に資することができるようになった点で大きな成果といえるだろう。所蔵者である薬師寺から特別許可を頂くことができ、堂内で銘文を拝見しつつ調査させていただけたことが望外の幸せであった。

おかげさまでこの碑銘においてもその書美をわかる範囲で再現することができた。薬師寺の全面的な御協力に深く感謝申し上げます

い。今後も仏教を中心とした文化の研究を推し進めていきたいと考えている。

○本研究は、第一～四・十一節を廣瀬、第九・十節を漆原、第五～八節を遠藤が執筆した。

○本研究は、武蔵野大学しあわせ研究所「令和四年度しあわせ研究費」採択によるものである。

### 【註】

- (1) 法相宗大本山薬師寺『東塔水煙降臨展』より。「料額印面の図案は飛鳥園の写真から郵政省技芸官渡辺三郎氏がデザインした。」と記す。
- (2) 沢村仁の論考「飛鳥・天平時代の塔」は沢村仁・渡辺義雄・入江泰吉奈良の寺10『薬師寺 東塔』（岩波書店、一九七四年）に掲載。その論考一頁を参照。
- (3) 前掲書・奈良の寺10『薬師寺 東塔』（岩波書店、一九七四年）論考ページ一頁を参照。
- (4) 井上光貞『日本古代の国家と仏教』（岩波書店、二〇〇一年）四一頁を参照。
- (5) 井上氏前掲書三三三頁から引用。
- (6) 奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観 補訂版』第六卷（岩波書店、二〇〇〇年）二七頁、小山満『仏教図像の研究―図像と経典の関係―』（向陽書房、二〇一一年）二二七頁を参照。
- (7) 書き下し文は、六大寺前掲書二六～二七頁、小山氏前掲書三三五～三三六頁を参照して作成した。
- (8) 東塔標銘の「式於高躅、敢勒貞金」は、『広弘明集』卷二八所収『西明寺鐘銘』（大正五二、三三〇上～中）の「式旌高躅、敢勒貞金」を参考にして書かれている。六大寺前掲書二六頁は標銘の原文を誤字と解して、「式高躅を旌し」と読む。小山前掲書二二九頁は標銘の原文「式於高躅」を採用している。本稿では標銘原文に当時の人々の信仰が反映されているものと理解し、原文を採用する。
- (9) 六大寺前掲書二七頁と小山氏前掲書二二七頁に先学の見解が表としてまとめられている。
- (10) 『西明寺鐘銘』は道宣撰『広弘明集』卷二八啓福篇に収められている。啓福は、慧皎撰『高僧伝』卷一三興福篇および道宣撰『続高僧伝』卷二九興福篇における興福とほぼ同義のものと理解される。
- (11) 井上氏前掲書五二頁を参照。
- (12) 悔罪は、国分尼寺建立の主要目的である滅罪とほぼ同義のものと解される。
- (13) 廣瀬裕之・漆原徹・遠藤祐介「奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究Ⅱ―左側面銘文として刻された書と成立過程―」（『武蔵野教育学論集』六、二〇一九年）を参照。
- (14) 廣岡義隆『佛足石記佛足跡歌碑歌研究』（和泉書院、二〇一五年）五一―九頁から引用。
- (15) 廣岡氏前掲書、五二二～五二四頁を参照。
- (16) 廣岡氏前掲書、五九六～六〇一頁を参照。
- (17) 廣瀬・漆原・遠藤「奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究―正面銘文として刻された書―」（『武蔵野教育学論集』四、二〇一八年）一

- 二九～一三二頁を参照。
- (18) 廣瀬・漆原・遠藤前掲論文「佛足石の研究」一三〇頁を参照。
- (19) 廣瀬・漆原・遠藤「薬師寺・佛足跡歌碑の研究Ⅰ―碑面上半部に刻された書とその内容について―」(『武蔵野教育学論集』一〇、二〇二一年)九七～九八頁を参照。
- (20) 1・8番歌は廣瀬・漆原・遠藤前掲論文「佛足跡歌碑の研究Ⅰ」九四～九六頁を参照。13・17・19番歌は廣瀬・漆原・遠藤「薬師寺の佛足跡歌碑の研究Ⅱ―碑面下半部に刻された書とその内容について―」(『武蔵野教育学論集』一二、二〇二二年)一二四～一二五頁を参照。なお関連性が強い箇所は太字で示した。
- (21) 遠藤祐介「六朝期における仏教受容の研究」(白帝社、二〇一四年)の補論第一章「帛戸梨蜜多羅と『灌頂経』」を参照。南朝宋訳は東晋の帛戸梨蜜多羅訳『灌頂経』の卷一二に組み込まれている。
- (22) 石田茂作「写経より見たる奈良朝仏教の研究」(東洋文庫、一九三〇年)所収の「奈良朝現在一切経疏目録」によると「南朝宋訳は天平五年(『大灌頂経』)、十年(『灌頂経』)、二十年(『十二灌頂経』)が一本ずつで合計三本。隋訳は天平三年が一本、天平五年が二本の合計三本。玄奘訳は天平五年が二本と年不詳のものが一本で合計三本。義浄訳は天平十四年と天平勝宝二年が一本ずつで合計二本」存在していた。
- (23) 機関管理番号・B11159(東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録』古写経篇、二〇一一年)  
ColBase 国立文化財機構所蔵品統合検索システム を参照。  
<https://colbase.nich.go.jp/collection/items/tmm/B-1159?locale=ja>
- (24) 山本幸男「写経所文書の基礎的研究」(吉川弘文館、二〇〇二年)
- 第三章「天平宝字六年～八年の御願経書写」を参照。
- (25) 五来重「薬師信仰総論」(五来重編『薬師信仰』、雄山閣、一九八六年)一九頁から引用。
- (26) 南朝宋訳では「琉璃」と「瑠璃」を併用している。
- (27) 石田氏前掲書所収の「奈良朝現在一切経疏目録」を参照。
- (28) 神田喜一郎「日本の漢文学」(『岩波講座 日本文学』第十六卷、岩波書店、一九五九年)一四頁、東野治之「銘文について」(『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編、一九七九年)一六八～一六九頁、東野治之「日本古代木簡の研究」(塙書房、一九八三年)二三四～二三六頁を参照。
- (29) 片岡直樹「長谷寺銅板の『道明』について」(『新潟産業大学人文学部紀要』二〇、二〇〇八年)を参照。
- (30) 遠藤祐介「梁武帝における理想的皇帝像―菩薩金輪王としての皇帝―」(『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』三七、二〇二一年)を参照。
- (31) 忍辱山円城寺 真言宗御室派 奈良県奈良市忍辱山町一二七三 天平勝宝八(七五六)年開基聖武・孝謙天皇、または万寿三(一〇二六)年命禅上人開山、文正元(一四六六)年兵火により焼亡、二十年後再興。
- (32) 小田原山法雲院淨瑠璃寺 真言律宗 京都府木津川町西小礼場四十 永承二(一〇四七)年、行基創建。
- (33) 高雄山報恩院岩船寺 真言律宗 京都府木津川市加茂町岩船上ノ門 四三 天平元(七二九)年 行基開山。
- (34) 補陀洛山海住山寺 真言宗智山派 京都府木津川市加茂町例幣海住山二〇 天平七(七三五)年、聖武天皇開基。

- (35) 普門山蟹満寺 真言宗智山派 京都府木津川市山城町綺田三六  
飛鳥時代後期七世紀末創建。江戸時代中期中興。
- (36) 神童寺 京都府木津川市山城町神童子不晴谷一・二 真言宗智山派  
推古天皇四(五九六)年、聖徳太子開基。治承四(一一八〇)年、  
平資盛により焼亡、源頼朝再興。元弘元(一一三三)元弘争乱で焼  
亡。六〇年後再興。
- (37) 昭和五十五年四月十五日指定。
- (38) 華判については、『袋中上人と山の寺念仏寺』念仏寺・元興寺文  
化財研究所編 二〇二二年十月刊(薬師寺山本潤氏のご教示によ  
る)参照のこと。同書には、華判を掲載するが、その版木は江戸時  
代のもので、関山佛足石に刻されている華判とは異なり、また南北  
朝期の明証のある使用例に接することはできなかった。
- (39) 『新潟県史資料編二十四 民俗・文化財三』一九八八年 新潟県編  
第一章第五節 一神像・仏像(一) 飛鳥・奈良期 『関山の金銅菩  
薩像』に、六世紀後半百済での制作とする。
- (40) ①木曾義仲寄進と伝える阿弥陀三尊像が関山神社境内の妙高堂に安  
置されている。②また連歌師宗祇が連歌会を開いたと伝えるのは  
『老葉』(文明十三)に「越後国関の山」とあることから事実とみ  
られる。③禅僧万里集九の漢詩集『梅花無尽蔵』によれば、長享二  
(一四八八)年に万里集九が関山に立ち寄ったことが判明する。④  
長尾能景により妙高堂に阿弥陀三尊を像奉納するので①は誤伝。
- (41) 織田信長によって武田氏が滅亡したのち、森長可が信濃国川中島四  
郡を(高井・水内・更科・埴科)を与えられ海津城に入って拠点と  
したのが天正十(一五八二)年四月。柴田勝家が上杉方の越中の拠  
点魚津城攻撃の支援のため、越後に侵攻を開始したのが五月二十三  
日である。上杉の部将芋川親正等と戦い田切城を攻め落とし周辺十  
四か村に放火したと『越後治乱記』(『越佐史料』巻六)にあるか  
ら、関山権現が焼討ちの被害にあったのは五月下旬であったと思わ  
れる。
- (42) 『系図纂要』『尊卑分脈』所収の新田系図参照『太平記』巻十一「新  
田義貞謀叛事付天狗催越後勢事」では、新田義貞率兵に際し、新田  
庄周辺の一族百五十騎で率兵した直後に、越後から里見・大井田・  
羽川・鳥山等新田一族二千騎が合流したと記しており、越後におけ  
る新田一族の勢力が大きかったことが推知できる。
- (43) 上野国守護在職徴証 観応元(一一三五)年十二月二十三日 幕府  
執事施行状 上杉民部大輔(上杉憲顕)宛 越後国守護在職徴証  
貞和三年九月十五日 上杉憲顕守護代長尾景忠請文 観応元(一一三  
五)年三月日 三浦和田茂実代重員重訴状に「・・・守護代景忠  
(長尾)・・・」とあり守護正員は上杉憲顕。
- (44) 江戸初期に寛永寺の末寺として天台宗関山宝蔵院として再興。『宝  
蔵院日記』
- (45) 昭和五十五年四月十五日指定、三十五体。

\* 武蔵野大学教育学部

† 武蔵野大学文学部

‡ 武蔵野大学グローバル学部